# トークセッション趣旨

山崎　憲治
（災害文化研究会世話人）

**基本の構造は**
**１）基調講演：山川充夫先生の「原子力と人間復興～社会的分断を超えるために～」**
**２）基調講演に続く、「分断を超えるために」に焦点を当て**
**研究会の活動を踏まえ、トークセッションでこのテーマへの接近を図る**

登壇者
司会；山崎憲治　　トークセッションでは「分断を超えるために」に焦点をあて論じる。

以下のような趣旨説明で、口火をきりたいと思います。

「地震や洪水など危機に直面する状況の中で、人々は利己的になるどころか、見知らぬ人のために行動するユートピア的な状況」（『「利他」とは何か』。p.53（伊藤亜紗））が生まれる。これは災害ユートピアを示しているのだが、衝撃の直後に留まるものなのか、復興や予知の段階でも問われる課題に違いない。衝撃直後に生まれる「利他」行動が、その段階にとどまらず、復興計画･実施、あるいは予知・警報の段階でも生まれており、むしろ全体を貫く軸を形成することが肝腎なことと思われる。「利他」を問い返して、自らを復興・成長させる「原点」に位置づけることはできないのか、その具体例はないのか。ここは、地域や社会を問う大きな視座になるに違いない。

危機に直面して生まれるスキルとしての災害文化を問う中で、基本的人間活動からこの「利他」を考えてきた。しかし、一時の行動と位置付けず、災害を通してとらえ直す課題として設定し直すことが必要だ。これは、シックドクトリンの現在を捉えることであるし、災害を超える可能性を見い出すことになるにちがいない。論議の中に、コモンという視点が出てくるであろう。地域の諸活動がコモンという課題と結び具体的に論じるなら、地域をつくる新しい回路を開くことになるし、分断を超える一つの道を示すとともに、継続を具体化させるに違いない。基調報告をこの方向で受け、９月の研究会の方向と結びつけて論議ができれば、問われている地球規模の課題まで視野に入れることができるのではないかとも考えることができる。

さらに、葛巻町の町長が、災害を契機に、過疎地域で太陽光発電、光ケーブルで、災害に直面しても、エネルギーの一定の確保、情報からの遮断・孤立を防ぐシステムをつくっている報告も示してくれる。雄勝の実践、さらには大槌の事例も加われば、厚みを持った論議ができる。「利他」から発して、それをいかに継続させることができるのか、地域に関わって具体的に論じるなかで、全体を変えていく方向と力が見え・生まれてくるのではないかと思われる。

指定討論者（９月のオンライン研究会で文献紹介と活動の方向性を示してくれた方にお願いした）。

熊本早苗　「災害ユートピア」が問うもの
鴫原敦子　ショックドクトリンから現在を問う
徳水博志　継続した復興活動･活動のなかから、可能性を問う
碇川豊　　大槌町の震災復興を問うなかから、自治の方向を探る

指定討論者の発言のあと、簡単な質問に答えた後、会場から自由な意見発表を求める。

３）現場の声として、葛巻町、町長鈴木重夫さんに現場からのメッセージとしての特別講演をお願いできた。町長が大会に参加できる時間が限られているため、基調講演の後に「特別講演」を設けた。また、葛巻町からポスターセッションへの参加も実現した。

４）ポスターセッション参加

葛巻町、NPO 法人津波太郎、シネマ・デ・アエル